



原著

ザンビア大学獣医学部の創設

—アフリカの未来を創る教育プロジェクトへの挑戦—

金川 弘司

北海道大学名誉教授

元ザンビア大学獣医学部技術協力計画国内委員会委員長

論文受付 2011 年 1 月 5 日 掲載決定 2011 年 2 月 4 日

要旨

1982年に、日本政府は、ザンビア政府の要請に応じて、約40億円を投じて、ルサカのメインキャンパスに獣医学部とその付属施設を建設・整備することを決定した。そして、獣医学部は1983年からスタートし、ザンビア国内における獣医師養成のための唯一の学部となった。獣医学部の発足以来、わが国から約200名のJICA専門家ならびに青年海外協力隊員が派遣され、教官として献身的な努力を続けた結果、1988年から毎年順調に卒業生を送り出し、ザンビア国内の獣医師数は年毎に増加続けている。1982年には、わずか8名だったザンビア人の獣医師は、1992年には、80名に増加し、その内58名がザンビア大学獣医学部の卒業生であった。現在は、約350名の獣医師が、主として地方で獣医師として、あるいは畜産の指導者として活躍をしている。

キーワード：アフリカ、ザンビア大学、獣医学部創設、JICA 教育プロジェクト、北大魂

ABSTRACT. Zambia is a landlocked country in south central Africa. The University of Zambia, located in the capital city Lusaka, was established in 1966. The School of Veterinary Medicine was established in 1983 to increase the availability of veterinary service in Zambia. In response to a request from the government of Zambia, the government of Japan helped build and equip the School of Veterinary Medicine at the Lusaka Campus beginning in 1982. In 1982, there were only 70 veterinarians in the entire country, of whom 8 were Zambian nationals. Since the first graduates left the School of Veterinary Medicine in 1988, the number of veterinarians in the country has grown accordingly. At present, the school has graduated about 350 Zambian veterinarians, and they are contributing greatly to improvements in animal health, public health and livestock production in Zambia. For the 15-year history of this project, success has been built upon a number of professional and personal exchanges between Zambia and Japan. The personal exchanges and technical cooperation of this project are contributing to both human resource and economic development in both Zambia and Japan.

1. ザンビア

ザンビア共和国 (Republic of Zambia、通称ザンビア、図1) は、アフリカ南部に位置する共和制国家で、かつてはイギリス領「北ローデシア」であった。海に面していない内陸国で、コンゴ、タンザニア、マラウイ、モザンビーク、ジンバブエ、ナミビアおよびアンゴラの7カ国に囲まれている (図2)。

1964年 (S.39) 10月24日に、自治政府を擁立して、



図1 イギリスの植民地「北ローデシア」から1964年 (S. 39) に、「ザンビア共和国」として、独立した。



図2 アフリカの地図、ザンビア(矢印)は赤道(中心付近のグレーの線)以南の中央に位置する内陸国である。



図3 世界自然遺産にも登録されている「ヴィクトリア瀑布」、滝の北側はザンビア、南側はジンバブエ。

イギリスから独立し、アフリカ諸国の中でも植民地支配から独立をする先駆けとなった。従って、「北ローデシア」として1964年の東京オリンピックに参加したが、閉会式には、「ザンビア」となり、開会式と閉会式で異なる国名となる一幕があった。

独立後は、国連に加盟し、国連の経済制裁決議に従って、アパルトヘイトを敷いていた南アフリカ共和国との経済関係を断つことになり、本プロジェクトの建設にも少なからず影響が出た。と云うのは、鉄材やコンクリートなどの建設資材の多くは南アフリカ共和国に依存していたが、それらが使えなくなり、質の悪いザンビアの国産品を使わざるを得なかったからである。



図4 ザンビア国内(白色)と11か所の国立公園(グレー)

ザンビアの南隣のジンバブエ国との国境に流れるザンベジ川には、世界三大瀑布の一つと称せられる「ヴィクトリアの滝」があり(図3)、1989年(H.1)に世界自然遺産に登録されている。国内には11か所に国立公園があり(図4)、アフリカを代表する野生動物、ゾウ、カバ、キリン、シマウマ、ライオンおよびヌーなどが多く棲み、大自然が良く保存されている。

ザンビア大学は、ザンビアで最も規模の大きい大学で、1966年(S.41)に首都のルサカ市に設立された。設立当初は、教育、人文社会および自然科学の3学部であったが、1967年(S.42)に法学、1969年(S.44)に工学、1970年(S.45)に医学、1971年(S.46)に農学、更に1973年(S.48)に鉱山学の各学部が設立され、そして本プロジェクトの獣医学部が1983年(S.58)に設立されて、現在では9学部を擁する総合大学(University of Zambia、通称UNZA)となった。

2. プロジェクト

ザンビア大学に獣医学部設立の構想が生まれた当時の1980年代(S.55)、ザンビア政府は地下資源(主に銅鉱)依存のモノカルチャー経済からの転換を目指し、国家開発計画の重要課題として、5年間(1979~83年、S.54~58)にわたる食糧の自給達成、農畜産業開発および人的資源の開発を掲げた。当時のザンビアの牛頭数は約280万頭と見積もられ、ほぼ国土を同じくする隣国ケニアやタンザニアの5分の1にすぎず、牛の総飼育頭数の80%が放牧を主とする粗放的な伝統的畜産業であるために、子牛死亡率は20~30%、成牛死亡率は9%および屠畜率は6%と低い生産性に留まってい

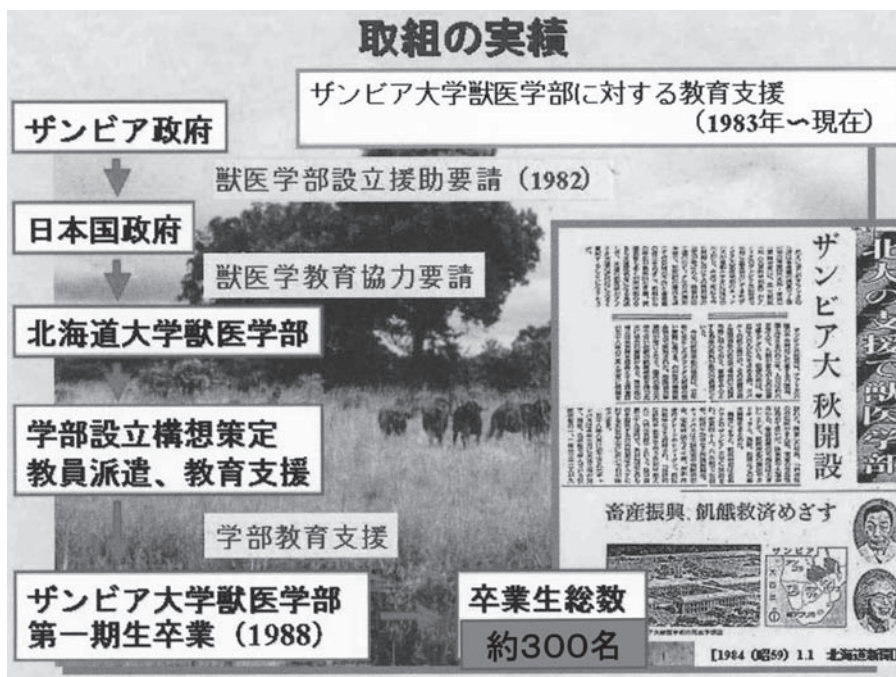


図5 北大が取り組んできたプロジェクトの概要

た。特に、数多くの家畜伝染病の常在による家畜の損耗や住民の健康をも脅かす人と動物の共通感染症の存在は、畜産振興の大きな阻害要因となっていた。また、口蹄疫や牛肺疫など感染力の強い疾病あるいはタイレリア症やトリパノソーマ症のように広範囲な地域に甚大な被害を与える疾患が存在し、各国の協力による国際的な防疫体制の整備が必要とされ、そのためにも、人材育成を含む家畜衛生対策の改善が急務となっていた。

以上のような背景の中、北大獣医学部では、図5に示したような「ザンビア大学獣医学部技術協力プロジェクト」が実施された。私は1983年(S.58)2月に、ザンビア大学獣医学部技術協力計画のJICA基本設計調査団の一員として、はじめてザンビアの土を踏んで以来、ザンビア大学獣医学部の誕生から、獣医師としての卒業生を送り出すまでの教育と設備の充実に力を注いだ。15年の歳月を掛けたこの技術協力計画は1997年(H.9)7月に終了した。なお、建設中の獣医学部と完成した建物は図6および7に示した。

わが国から2万キロ以上も離れているアフリカ大陸の真っ只中に、北大獣医学部と同じ規模のザンビア大学獣医学部を建設するという壮大な試みは、当初から計画通りスムーズにという訳にはいかず、数々の困難に遭遇しながら、わが国の獣医・畜産関係機関全域にまたがる関係者の理解と協力を頂きながら、計画の適

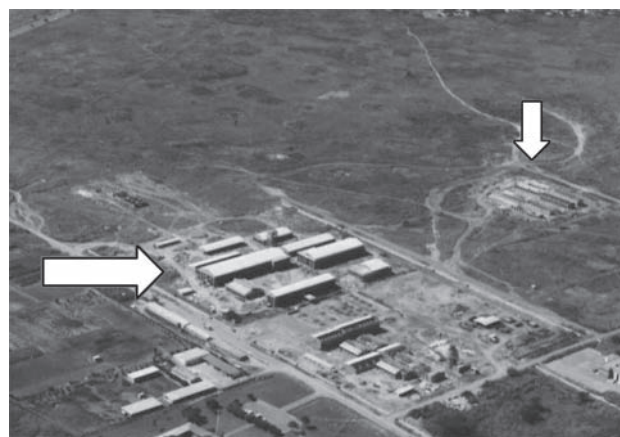


図6 ザンビア大学キャンパス内に建設中の獣医学部(大矢印)と学生寮(小矢印)(1984)

正な遂行に努め、現在では、アフリカでも有数な施設・設備を持ち、かつ優秀な人材を有する獣医学部として成長し、既に300余名の卒業生(新しい獣医師)を輩出し、ザンビアの獣医・畜産および家畜衛生面で活躍をしている。第1期生の卒業式の様子は、図8に示した。本プロジェクトで特徴的なことは、人材養成にも力を入れ、ザンビア大学獣医学部の卒業生たちを積極的に留学生として、わが国の獣医系大学に留学させて、学位を取得させ、帰国後は、ザンビア大学獣医学部の教官として後輩獣医師の養成に当たってもらい、ザンビアナイゼーションに力を入れたことである(図9)。更

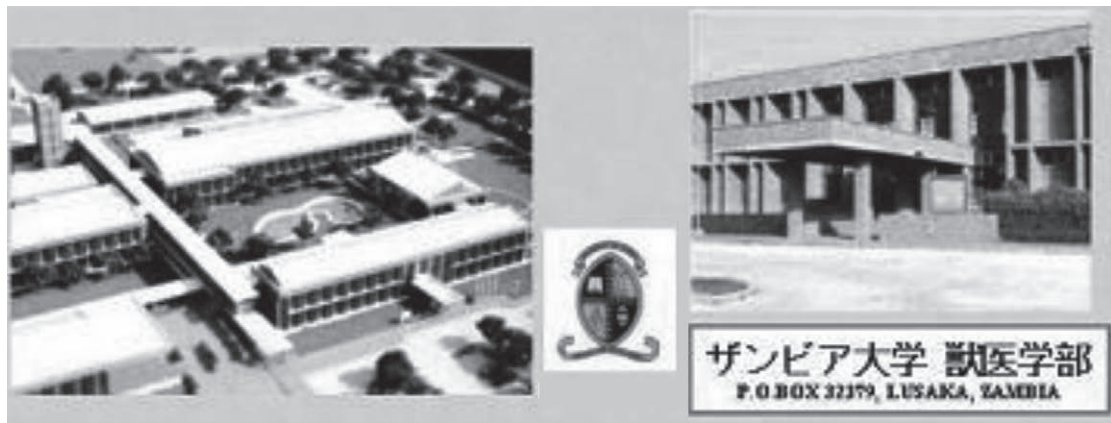


図7 完成した獣医学部本館（左）と正面玄関（右）(1986年3月)



カウンダ大統領自ら出席厳粛な卒業式



家族と喜びを分かち合う卒業生

図8 獣医学部第1期生13名の卒業式(1988年8月)

に、第3国研修を展開して近隣諸国をはじめ南部アフリカの獣医学の教育・研究・普及面で大きく貢献しており、本プロジェクトが成功裡に実を結ぶことが出来た。

このJICAの技術協力計画に要した15年の年月には、わが国から派遣された180名以上の長期・短期専門家、青年海外協力隊員、調査団員および多くのJICA関係者が関わり、ザンビア大学獣医学部の管理運営、学生の教育・研究の指導などに、多大の貢献をした。特に、長期・短期の専門家（主に教官）として参加を頂いた方々には、図10に示した様な専門家としての心構えを理解して頂き、青年海外協力隊の方々にも図11に示したように帰国後もその経験を生かしてもらえるように努めた。また、ザンビア側からは50名以上の留学生と研修員がわが国に留学し、わが国とザンビア国間で密度の高い人的交流が行われてきた。私が北大獣医学部長を勤めていた1993年（H.5）には、北大獣医学部とザンビア大学獣医学部が姉妹提携を結び、その後1996年（H.8）と1999年（H.11）に更新され、北大獣医学部学



図9 現在のザンビア大学獣医学部長
Dr. Aaron Mweene 文科省の国費留学生として、北大でPh.D.を取得後帰国、約30名の教官の内、20名が日本に留学をして各位を取得後に帰国。

図10 専門家の要件

1. 適応性、柔軟性、協調性、楽観性
2. 語学力：英語 + 現地語
3. 専門的知識と技術
4. 健康、スタミナ
5. 国際感覚（常識的な日本の知識）
6. 正義感、情熱、努力
7. 感謝、謙虚

図11 青年海外協力隊—世界に広がるJOCV ボランティア—

開発途上国の人々のために、現地の人々とともに

- * S. 40年（1965）にスタート、45年間、80カ国、3万5千人
- * 20～39歳、2年間
- * 農林水産・保健衛生・教育文化・スポーツ・行政
（知識・技術・経験・趣味・特技・・・）

帰国後：*大学院に進学・先進国に留学

→ *専門家あるいは国際社会で活躍



図12 国際獣医学教育協力推進プログラム
北大獣医学部の学生たちが夏休みにザンビアを訪問して、交流・連携を深めた（2007、H.19）。



図13 ザンビア大学獣医学部技術協力プロジェクトに関わった関係者による「ザンビア会」

生も夏休みや冬休みを利用してザンビアを訪問するなどの交流を続けており、開発途上国における獣医師の活動を通じて、自らも学習し、理解を深めていることは大変喜ばしいことである（図12）。

本プロジェクトが開始され、終了されるまでに、わが国の獣医関係者のどれほどがザンビアのことあるいはアフリカのことを知っていたであろうか。このプロジェクトを通じて、わが国関係者もアフリカについて多くのことを学び経験を積んだことは言うまでもない。人的交流や物流も世界中を駆け巡る現代の国際社会にあって、アフリカや諸外国の病気が日本には関係ないとは言えない時代である。現実に2000年（H.12）と2010年（H.22）には口蹄疫の発生があり、今から8～9年前には牛海綿状脳症（BSE）の発生がみられ、いつ海外悪性伝染病が侵入してくるか解からない状況にある。ザンビア大学獣医学部には、日本の大学や研究所で学んだ数多くの若手教官が教育に携わり、獣医学部の研究に活用可能な立派な施設も出来ている。獣医学部の基盤を確立するというザンビア大学獣医学部技術協力計画はその使命を終えたが、今後ともわが国関係機関との共同研究や学術交流、更には新たな国際協力がアフリカから発信される最大かつ最適な拠点として

活用され続けることが望まれる。

プロジェクト終了後は、ザンビア大学獣医学部技術協力計画に関った多くの教官や専門家で、「北海道ザンビア会」を結成して、ザンビア大学獣医学部の情報収集や会員同士の親睦を深めると同時に、ザンビアからの留学生や訪問者との交流を行っている。また毎年、ザンビア大学獣医学部卒業生の中で優秀な学生に対して「北海道ザンビア会賞」を贈呈し、獣医学教育の啓蒙的役割を続け、好評を博している（図13）。

3. おわりに

私は30代の10年間を北米で研究生生活を送ったが、北大の前身は、「札幌農学校」であり、その初代校長はクラーク博士で、元々北大の建学の精神として、フロンティア・スピリットとして海外で活躍することが推奨されており、昨年度のノーベル化学賞の鈴木 章名誉教授も、若い時にアメリカに留学をし、その時の研究がノーベル賞に繋がったという。図14と15には、北大の建学の精神とクラーク博士の有名なBoys be ambitiousの一節を示した。

そして図16にはアフリカの地図を載せたが、この大

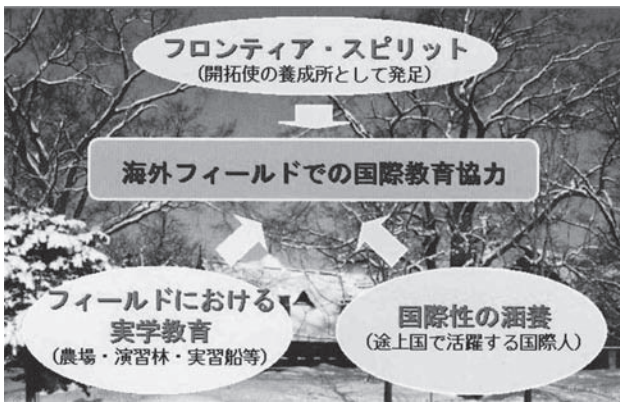


図14 北大の建学の精神

“Boys be ambitious !” Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, nor for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for knowledge, for righteousness, and for the uplift of your people. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be...

青年よ、大志を抱け！ 金のため、利己的栄達のためではなく、ましてや人よんで名譽と称する空しきものためにでもない。知識に対して、正義に対して、かつ皆んなの向上のために、大志を抱け。人として、まさにかくあらねばならぬ全てのことを達成せんとするために、大志を抱け。

Message of Dr. William Smith Clark (1877)

図15 Boys be Ambitious !

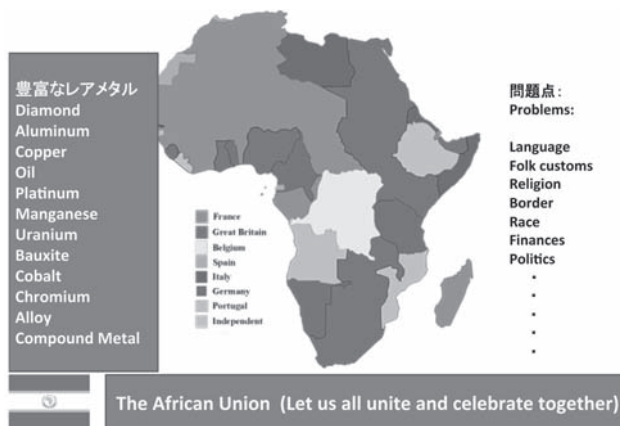


図16 アフリカの開発なくして 世界の発展はない

きなアフリカが、未だに未開の途上国として残っている現状を何とか打破し、夢と希望に満ちた元気なアフリカにすることが、全世界の発展に大きく貢献することになると確信している。

終わりに、15年に亘って、このプロジェクトにご協力にご参加を頂き、ご支援を下さった多くの先生方や関係者に心からお礼を申し上げる。特に、JICA関係者の皆様方には緑の下の力持ちとして、陰に日向に本プロジェクトの推進と成功に多大のご指導・ご尽力を頂いた。わが国の政府開発援助 (ODA) と国際協力事業団 (JICA) なしに、本プロジェクトの成功はなかったと言っても過言ではない。ここに関係した皆様方に、改めて深甚なる謝意を表す。

なお、2009年 (H.21) に、独立行政法人国際協力機構 (JICA) 国際協力人材部総合研修センターは、本プロジェクトを小冊子に纏めて、派遣専門家の研修用教材として利用している (参考資料2)、図17)。



図17 校舎の建設、器具機材の供与、専門家 (教官) の派遣、人材養成 (留学生・研修員の受け入れ)、カリキュラムの検討など、濃厚な交流で成功した教育プロジェクトの一例

4. 参考資料

- 1) 国際協力事業団畜産園芸科およびザンビア大学獣医学部技術協力計画国内支援委員会編 (1998) ザンビア大学獣医学部技術協力計画—12年半の協力の軌跡— (1985年1月~1997年7月) : 1-497.
- 2) 独立行政法人国際協力機構 (JICA) 国際協力人材部総合研修セミナー編 (2009) JICAプロフェッショナルの挑戦、シリーズ8：ザンビア「ザンビア大学獣医学部」関連プロジェクト : 1-222 (図17)。
- 3) 北海道大学獣医学研究科編 (2004) 国際獣医学教育協力推進プログラム、アジア・アフリカ諸国を視野において : 1-13.

表1 継続は力なり！

(30年間に及ぶザンビア大学獣医学部技術協力計画に関する主な年表)

1982年	8月	ザンビア政府が日本政府にザンビア大学獣医学部設立のための無償資金協力和技術協力を公式に要請
1983年	2月	無償資金協力基本設計事前調査団として、金川の派遣
1983年	8月	本体施設建設の24億円の無償資金協りに係る交換公文署名
1983年	9月	ザンビア大学獣医学部第1期生13名が自然科学部での1年間の教養課程を終え獣医学部に進学、2年生は農学部および自然科学部と共通の基礎科目を履修
1984年	3月	校舎の建設開始(図6)
1984年	7月	付帯設備・主要機材約15億円の無償資金協りに係る交換公文署名
1984年	9月	第1期生13名3年生に進学、基礎獣医学の科目が開始され、獣医学教育が本格化
1984年	10月	長期調査員として金川の派遣
1985年	1月	プロジェクト方式技術協力実施協議調査団派遣、討議議事録(R/D)署名
1985年	8月	最初の専門家チームの派遣
1985年	10月	新4年生に対して獣医基礎臨床学の日本人専門家による講義・実習開始
1986年	1月	計画打合せ調査団として金川の派遣
1986年	3月	獣医学部施設竣工、引き渡し式挙行(図7)
1986年	7月	青年海外協力隊派遣開始、4名が着任
1986年	10月	カウンダ大統領列席による獣医学部公式オープン式典開催
1987年	1月	巡回指導調査団として金川の派遣
1987年	3月	プロジェクト基盤整備費による付属パドック完成
1987年	12月	巡回指導調査団として金川の派遣
1988年	8月	獣医学部第1期生13名が卒業(図8)
1989年	8月	プロジェクト終了時合同評価のために金川の派遣、1992年7月まで2年半の協力期間の延長を提言
1992年	7月	フェーズII実施協議調査団として金川の派遣、フェーズII協力が開始される
1994年	1月	大学院修士課程プログラム開講、第1期生4名が入学
1996年	10月	プロジェクト基盤整備費による感染実験動物舎完成
1996年	12月	終了時合同評価を実施、協力期間内の目標達成を確認するために金川の派遣
1997年	4月	獣医学部設立10周年記念シンポジウム開催
1997年	7月	プロジェクト方式技術協力の終了
1998年	10月	プロジェクトのフォローアップと第3国研修事前調査のために金川派遣
1999～2003年		第三国研修「熱帯地域家畜疾病の診断・予防コントロール」
2000～2011年		科研・国際共同研究「野生動物の疾病・繁殖」
2004～2008年		国際獣医学教育協力推進プログラム(ザンビア大学獣医学部との学生交流、研究交流、教育連携など、図12)
2005年	3月	技術協力プロジェクト「家畜衛生・生産技術普及向上計画」の事前調査
2006年	1月	技術協力プロジェクト「家畜衛生・生産技術普及向上計画」の開始
2007年	4月	ザンビア大学獣医学部内に北大人獣共通感染症センターのザンビア拠点を設置
2008年	6月	技術協力プロジェクト「家畜衛生・生産技術普及向上計画」の評価調査団
2009年	1月	技術協力プロジェクト「家畜衛生・生産技術普及向上計画」修了